請願第１号・第２号に対する賛成討論

2025.12.23 藤木

請願第１号「アスパルこうちのグラウンド存続を求める件」、および請願第２号「高知市青年センターグラウンドを残すことを求める件」について、会派を代表し、賛成の討論を行います。

この２つの請願は、同じ一つのグラウンドをめぐるものです。一つは、不登校の子どもたちを支える立場から、もう一つは、青年・若者の立場から提出されました。このグラウンドが、世代や背景の異なる多くの人にとって、かけがえのない場であるという点で、訴えは一致しています。この重みを、私たちは深く受け止めるべきです。

教育支援センターみらいに通う子どもたちは、不安や緊張を抱え、人との距離や空間の広がりに特別な配慮を必要としています。「不登校支援の充実を求める会」が実施したアンケートに寄せられた「グラウンドのような空間がなくなると息苦しくなる」「安心して過ごせる場所を残してほしい」という声は、切実な願いです。

同時に、このグラウンドは、青少年や地域住民にとって、スポーツや体験活動を通じて人と出会い、地域とつながる大切な場として、長年使われてきました。だからこそ、様々な立場の市民が、それぞれの言葉で「グラウンドを守ってほしい」と声を上げたのです。

ここで、市政運営のあり方として、極めて重大な問題を指摘しなければなりません。

現在、高知市教育委員会は、青年センターのグラウンドの今後の利用に関して、利用者を対象としたアンケート調査を実施している最中です。にもかかわらず、その結果が出る前に、事実上、グラウンドの全面転用を前提とした方針が、県と市のトップ同士の協議によって固められてきました。

この問題については、12 月 18 日に開かれた第 4 回新県民体育館整備等基本計画検討会において、検討会の委員長自身が、次のように述べています。「知事と市長の間でトップ同士の判断で決まっていく。まだ正直このアンケート調査も終わっていない状況では、すごく拙速だなあと思っている」これは、反対運動の声ではありません。県が設置した公式な検討会の委員長による、極めて重い指摘です。さらに検討会では、「地域コミュニティを活性化し、にぎわいをどうつくるのかの議論が後手になっている」「敷地が狭いのが問題、他の場所も検討すべきでは」「アスパルこうちの不登校を支援されている方々が懸念している」といった意見も出されました。これらの発言は、計画の中身以前に、進め方そのものが問われているということを、はっきり示しています。

私たちは、新しい県民体育館の整備そのものを否定しているのではありません。しかし、市民の声を聞いている最中に、結論ありきで進める計画が、本当に「未来への投資」と言えるのか。土地の所有者は高知市です。高知市には、子どもや若者の「今」と「これから」に責任を持つ義務があります。

アンケート結果を含め、当事者の声を真正面から受け止め、立ち止まり、議論を尽くし、合意形成することが、今こそ求められています。

グラウンドをめぐって、市民から２つの請願が提出されたという事実は、高知市議会に対する強い問いかけです。私たちは、「声を上げざるを得なかった、差し迫った思い」に、どこまで向き合える議会なのか。市民の声に、正面から応える議会であるべきだと考えます。知事と市長が協議し方針が決まり、議会は意見を言えない。そのような市政運営でよいはずがありません。今こそ、議会の役割、本来のチェック機能を発揮する時ではないでしょうか。

請願第 1 号、請願第 2 号の両請願を採択することを、同僚議員の皆さまに心から訴え、賛成討論といたします。